

chapter 02

寄せられる声／ 応答する取り組み

相談支援研究会 & 研修報告

SOUPが2016年度に行った、
教育分野と芸術分野での
相談支援研究会報告に加え、人材育成研修、
著作権などの権利保護に関する研修、
運営のマネジメントを学ぶ
ステップアップ研修の内容をご紹介します。



SOUPの研究会

相談支援研究会

取り組みのねらい

さまざまな分野の関係者が連携することを重視し、「まぜると世界がかわる」をキーコンセプトに活動しているSOUP。そのため相談の対応や解決も、福祉、教育、芸術、行政、NPOなど多様なセクターと連携したいと考えました。

しかし事業が開始して1年目の2014年度には、まだまだ連携がうまくなされず、スタッフのスキルにも差異がありました。そのため2015年度には「相談支援研究会」を設置し、研究会を通して、顔の見える相談先・連携先をつくること、対応の質的向上をめざしました。

2015年度の実施内容

第1回：相談支援とは何か

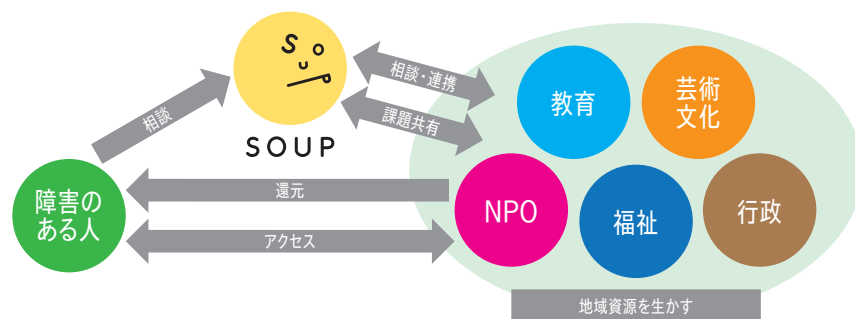
内容：NPOセクターの相談支援員を講師に、相談対応の業務フロー〔相談・記録・検討・対応・結果・検証〕、他機関との連携などを学びました。

第2回：宮城の相談ケーススタディ検証① 福祉分野

内容：芸術分野や市民活動、福祉、行政職員が参加。顔合わせ、情報交換を行うことができ、実際に支援対象者からの声を共有しました。

第3回：宮城の相談ケーススタディ検証② 芸術分野

内容：実際の相談内容とその対応方法について事例を検証しました。文化と教育分野の関係者との連携がまだ整っていないことなど、課題を確認する機会にもなっています。



●図：SOUP、障害のある人、地域資源、三者のネットワークづくりイメージ図

2016年度の実施内容

第4回：教育分野連携編

日時：2016年11月24日（木）14:00～16:00／

みやぎNPOプラザ 第2会議室 ※非公開

参加者：仙台市教育局、宮城県障害福祉課、仙台市障害者支援課、本モデル事業連携事務局（滋賀県）、エイブル・アート・ジャパン東京・東北事務局

内容：宮城における相談として教育関係者とのケーススタディ検証や情報共有、またモデル事業連携事務局による滋賀県における教育と福祉の連携事例の発表などが行われました。

第5回：芸術文化セクター連携編

日時：2016年3月13日（月）10:00～11:00／

仙台市市民活動サポートセンター 研修室5 ※非公開

参加者：宮城県消費生活文化課、学芸員、芸術セクター館長、市民活動支援施設センター、弁護士、大学教員、エイブル・アート・ジャパン東京・東北事務局

内容：実際の相談内容とその対応状況について事例を紹介し検証。宮城県内のアーティストの契約、寄贈に関わる課題等を議論しました。

成果

研究会というスタイルにすることで、福祉関係者、教育関係者、芸術関係者、行政など多様なメンバーが関心を持って集まる機会となりました。相談支援は縦割りであることが多いですが、障害のある人が持っている複合的な側面を支援するためには、多様な地域資源を生かすことが必要です。そのために領域横断型の関係者のつながりをつくり、地域のネットワークを育むことも大切です。また、障害のある人の相談を通じて課題などを関係機関と共有することで、障害のある人が地域の資源にアクセスしやすくなります。

こうした場を持つことが、結果的に顔の見える相談のネットワークが構築され、相談支援体制の充実につながり、電話一本での情報共有が可能な関係性の構築や、相談対応のボタンをわたすことができるようになりました。芸術活動支援では、展示会などの華やかな催事に注目が集まりがちですが、これを底支えるのが日々の相談業務とその対応の質や、対応者の多様性であるとわたしたちは考えます。

人材育成研修

一緒に見つける可能性 それぞれの表現と創造力を開花させる 支援方法と必要性



2016年9月29日（木）／社会福祉法人なのはな会はまなす苑 ほか

対象者：表現活動を行う福祉施設のスタッフ、アートスタッフ、アーティスト ほか

ファシリテーター：ライラ・カセム [Laila Cassim]

（グラフィックデザイナー／東京大学先端研究センター特任助教）

取り組みのねらい

仙台市にある、生活介護事業所はまなす苑の表現活動の現場を訪問。ファシリテーターから、福祉施設で行った表現活動の実践事例についてお話いただき、参加者でディスカッションを行いました。活動訪問や講演、ディスカッションを通して、表現の可能性や多様性を発見し、それぞれの表現と創造能力を開花させるには、どのようなサポートが必要かを考えました。また障害のある人の表現活動に関わる人たちのネットワークづくりを目的に、語りあう場を設けました。

実施内容

はまなす苑では5年前からクラブ活動として絵を描くことを始めています。筆を持つことからスタートし、時間をかけて活動を進め、現在は仙台市内で作品の発表も行っています。施設の見学をした後、同法人で運営するカフェに移動し、活動訪問を振り返りました。ライラ・カセムさんからは、東京都足立区にある綾瀬ひまわり園にて利用者・スタッフと信頼関係を築き上げ、対等の立場でものづくりを行ったプロジェクト「entente」によって生まれた「創造能力を開花する8つの方法」[*]をお話いただきました。これは、ライラさんが1年間にわたりアート講師として毎週福祉施設に通い、障害のある人一人ひとりに寄りそいながら、スタッフと

試行錯誤し開発したものです。

*LAILA CASSIM INC. (<http://www.lailacassim.com/8methods/>) 参照

成果

重度の障害のある人が通う福祉施設を会場とし、県内で活動する作家や支援者、専門家などが集まり、表現が生まれる現場の環境や支援方法の大切さを改めて学びました。はまなす苑では、普段の作業では力を発揮しにくい人でも、表現を行うことで他者に認められることがあるなど、芸術活動が相互理解をすすめるきっかけになっているそうです。ただしスタッフだけでは活動の幅に限界があること、人員不足により表現活動の時間を持つことが難しくなっている課題もありました。参加者からは「アートは難しいことではなく、頭を柔らかくすることだと気づきました」といった感想がありました。支援者の工夫が、表現をひきだしながらも質の高いアート作品をつくることにつながり、それが障害のある人の個別な支援にも有効であり、施設への新しい価値の発見につながるようになりました。また、作品を発表することが障害のある人の活発な社会参加をもたらすきっかけにもなります。

人材育成研修

表現するところ・からだを育てる ダンスと音楽編@仙台／栗原



仙台会場：2016年10月12日（水）／日立システムズホール仙台 練習室1

栗原会場：2016年10月19日（水）／風の沢ミュージアム

対象者：障害のある人、家族、福祉施設スタッフ、教育関係者、アーティスト、学生 など

ファシリテーター：里見まり子（即興舞踊家／宮城教育大学特任教授）、山路智恵子（即興音楽家）

取り組みのねらい

SOUPは2014年から人材育成事業として、体験に重きをおいたワークショップ型研修をくり返し実施してきました。障害のある人の表現を引き出し、可能性を広げるには、関わる人たちのうけ取り方や見方、視点を柔軟にする必要があると考えています。そういった感覚を養うため、五感を使って感じたことを吸収し、それをアウトプットする表現の場づくりを行うことを目的としました。

実施内容

仙台会場：日立システムズホール仙台、台原森林公園を会場に開催しました。最初に室内で音に耳を澄まし、仲間を感じて身体を動かしたり、大きい声で叫んでみるなどのアイスブレイクを行いました。その後、まわりのものや人と関わり音を出しながら台原森林公園に移動。トイレトペーパーを使い風を感じ、列をなして行進のように歩いたり、銅像や階段に触れながら身体を動かしました。最後に、森の中で円になり新聞や葉っぱ、楽器などを使い、即興で音のリレーを行いました。

栗原会場：風の沢ミュージアムの古民家の縁側や里山を会場に開催しました。まずはトイレトペーパーを使い風を感じたり、目を閉じてどんな音がきこえたか共有。その後、円に

なり土鈴や声を使った音のリレーを行いました。まわりと関わりながら竹や土鈴や楽器で音を出して里山を歩いたあと、連なりながら寝転んだり、参加者同士背中合わせになって、互いの動きを感じたりしました。参加しての感想を、一人ずつ音や動きで発表して終了となりました。

成果

この研修に参加した人からは、「自然にリズムや流れが生まれることがわかり、私自身その一部になれたことがうれしかったです」「普段は笑顔が少ないみんなが笑顔になっていました」との声が。支援者も一緒に体験することで、心や身体をほぐし、障害のある人の可能性を制限せずにひきだすことの必要性を実感として理解してもらうよう試みしました。こうして五感を使いまわりと対話すること、感じることを大切に、豊かな表現を生むことにつながりました。障害のある人の表現の可能性は広がっていても、障害のある人に寄りそい、ひきだす支援者が見方や価値観を制限してしまうと、その可能性はまた狭まってしまいます。そのためには障害のある人とともに、支援者も心も身体もほぐし、まわりと対話すること、感じる事が大切です。それが障害のある人との可能性を広げ、豊かな表現を生むことにもつながります。

人材育成研修

表現するところ・からだを育てるカメラ編@仙台

2016年12月7日(水)／コニカミノルタジャパン株式会社 東北支店

対象者：みえない人・みえにくい人、みえる人(介助者含まず)

協力：コニカミノルタジャパン株式会社東北支店、株式会社ニコンイメージングジャパンニコンプラザ仙台

ファシリテーター：クロスロードアーツ [Crossroad Arts]

スティーブ・メイヤーミラー [Steve Mayer-Miller] (クロスロードアーツ芸術監督・CEO)

ブレンデン・ボレリーニ [Brenden Borellini] (写真家／クロスロードアーツ・メンバー)



取り組みのねらい

2014年から取り組んできた宮城の視覚障害のある人たちとの鑑賞と表現の活動を経て、視覚障害を持つ人たちから、写真を撮りたい、表現、発表したいという声をうけました。そこで活動のきっかけになったオーストラリアの盲聾の写真家と彼をサポートしている団体をお招きし、ワークショップを企画。これをきっかけに環境を整備し、視覚障害のある人たちが継続的に表現活動を行えることをめざしました。

実施内容

ワークショップのタイトルは「WALKING IN SOMEONE ELSE'S SHOES 一誰かの靴を履いて歩く」。参加者は会場に入る前にアイマスクをつけ(視覚障害のある参加者はそのまま)、くだものや野菜を持って感じる香りや味、手触りから導き出される過去の記憶について語りました。その物語を一眼レフカメラを使い、写真として表現しました。最初に、誰かの靴を履いて歩いた経験を思い出しながら、自分の靴、もしくは他の誰かの靴の写真を撮影。次に、参加者はサポートの大学生や介助者と一緒に街に出て、写真を撮りました。最後にペアになって、会話などで互いの存在を確認してから相手を撮影しました。ここで撮影した写真は、立体コピー写真として出力し、触って凹凸(おうとつ)を感じながら鑑賞しました。

成果

参加者からは「目がみえなくなっても、こういう世界で表現できるのだということをしあわせだと思います」といった声がかかれました。これまでの活動を通して、視覚障害のある人たちに表現活動をしようと呼びかけても、新しい体験の情報を得ること、外出することそのものにも、たくさんの壁があることを知りました。そこで可能な限り、彼らを支える支援者との関係づくりや情報共有をすすめ、その過程で地元企業の協力を得て、社員のみなさんが印刷のサポートを行うなど、積極的にこの活動に参加しました。また、地元の大學生も参加者兼サポーターとして多数参加しました。2017年1月には、作品やワークショップの記録動画をニコンプラザ仙台で展示し、活動を発信しました。このワークショップは、言葉でのコミュニケーションが通じにくい場でも、五感を使うことで互いにわかりあうことができ、障害があっても表現ができるということを体験しました。その人の障害を知り、一方で活動を阻害する”障害”を明らかにし、問題をとりぞいていくことが大切です。

人材育成研修

美術と手話プロジェクト@宮城

2017年2月4日(土)／宮城県美術館

対象者：きこえない人、きこえにくい人、きこえる人、

美術と手話プロジェクトに興味のある人、学生 ほか

ファシリテーター：齋 正弘(宮城県美術館教育普及部 学芸員)、美術と手話プロジェクト



取り組みのねらい

聴覚障害のある人は、モノをみているから美術鑑賞におけるサポートは必要がないと考えられがちです。しかし、美術と手話プロジェクト[詳細は64ページ]の活動を丁寧にかがったところ、手話を第一言語としている人たちにとって、美術館におけるギャラリートークにはなかなか手話がつかないこと、チケット売り場でみたい・知りたい美術展の情報が得にくいこと、使用する言語が異なるため掲示された作品解説などは理解が難しい・言葉の意味がよくわからないことなど、さまざまな困難があることがわかりました。そこで、聴覚障害のある人たちと美術鑑賞の体験を共有し、芸術文化を楽しもう! という気運醸成を宮城県で図ろうと、美術と手話プロジェクトとのワークショップ型研修を実施しました。

実施内容

SOUPの事務局は美術と手話プロジェクトと情報交換を重ね、3カ月間にわたるリサーチで活動に参加するキーパーソンたちを訪問し、仲間を集めました。聴覚障害のある人、手話に関心がある人、聴覚障害のある人たちの社会参加に関心のある人で教員やNPOの方などが集まりました。当日は教育普及の学芸員が常駐する創作室に集まり、美術と手話プロジェクト代表の西岡克浩さんが手話で活動紹介を行い、美術たんけん@宮城県美術館と題して常設展を鑑賞。学芸員は全身全霊で解説をし、手話通訳者もそれに続きました。きこえない人はみることで情報を得るため、解説する

人と作品を隣り合わせにすること、解説する人は手話による解説が終わるまで待つこと、じっくり作品をみてから説明をきいてもう一度作品をみることなど、美術館側も参加者側もさまざまな工夫と相互理解により、注意深く丁寧に美術たんけんをすすめました。ハイライトは、美術館自慢のカンディンスキーの作品4点の鑑賞と、佐藤忠良をめぐる3人の彫刻家の作品鑑賞でした。銅像作品1点を触り、盲聾の参加者も直接鑑賞できる時間もありました。

成果

鑑賞のあとに参加者と感想を共有し、そこで「作品が動いた」と語った参加者がいました。それは、学芸員とともにみる・手話でみる・真剣にみることで、作品が初めて生き生きと立ち上がり、まるで動いたようにみえてきた、ということの説明した言葉でした。また「今まではただ一人で作品をみつめていたが、今日の体験から、学芸員の役割、美術館の役割を知った。手話(または口語)で対話しながら作品をみてもいいんだと体験できた。今度はきこえない子どもたちを連れて来たい」と語った人もいました。聴覚障害のある人たちが感じる社会モデルとしての“障害”が明らかになり、「美術」「美術館」「手話」「きこえない人」というキーワードに関心を持つ人たちがそれぞれが宿題を心にとめた時間となりました。美術館という場であれ、表現する場づくりをする側であれ、教育の場であれ、この宿題をしっかりと次の行動に結ぶことが、この研修の成果になると考えます。

著作権研修

アートと著作権 研修

基本編：2017年2月16日（木）／みやぎNPOプラザ

応用編：2017年3月2日（木）／みやぎNPOプラザ

対象者：障害のある人、その家族や支援者、活動パートナーとなる人（作品を紹介したいギャラリスト、商用利用したいデザイナー、レンタル事業に展開したい企業等）

ファシリテーター：辻 哲哉（弁護士／Field-R法律事務所／特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン理事）

取り組みのねらい

本モデル事業では、障害のある人たちの芸術文化活動に携わる人材に著作権研修を行うことが義務づけられていますが、講座を担当する辻哲哉弁護士との打ち合わせを経て、表現活動とともに生まれる権利である「著作権」について、障害の有無に関わらずすべての人に共通の権利として、自分ごととして考えられる力を育む研修を実践したいと考えました。モデル事業1年目の2014年度は、まだまだテーマの認知度が低く参加者も限られていたため、2年目である2015年度も1年目と同様の内容を「基本編」として実施。さらに、宮城県でも著作権などに関わる相談内容が増加しつつあったため、実際に宮城県内で発生した事例をもとに、著作権の考え方、生かし方を対話形式で学んでいく「応用編」を新たに設定しました。「応用編」には、1年目、または2年目の「基本編」を受講した人のみが参加可能としました。なお2016年度も2015年度と同様のスタイルとしました。

実施内容

第1回 アートと著作権【基本編】

①事例編、②資料編、③回答編の三つの資料で構成。参加者には①事例編、②資料編の資料を配布し、一定の時間内で一つの事例を読み、そこに続く問いについて考え、講師と参加者による対話形式で回答を探ります。参加者からいくつかの意見や回答がでたあと、②資料編をもとに「著作権」に関する学びを深めました。ときには理解を深めるため、辻弁護士から身近な話題、わかりやすく具体的な情報が紹介されました。最後にいつでも復習できるよう、③回答編を配布。全体で180分の講座です。

第2回 アートと著作権【応用編】

応用編も基本編と同様のスタイルで実施しました。

成果

2014年度にモデル事業を始めたとき、東北ではまだまだ二次利用の実例が少なかったといえます。そこで実践をうながす必要性を感じ、2014年の展示会では、障害のある作家のイラストを使用した企業の商品と著作権使用の取り組みを紹介したところ、大きな反響がありました。2015年には、新たな作家のイラストを使用して包装紙を作成し紹介。支援団体や家族とライセンスの考え方の整理を行い、作家の個展会場での販売に至りました。またこれと並行して、チラシや報告書に積極的に作家のイラストを活用し、そのプロセスを公開、それぞれの作家や事業者の動きを生み出すきっかけづくりにつとめました。日常の相談支援の中でも、広告や商品への採用など実現に至らなかった内容を丁寧にうけとめ、著作権使用料の提示の仕方、権利関係の確認、契約書づくりなどを行ってきました。

作品の二次利用による商品化やライセンス事業は一朝一夕のものではありません。しかし、3年間の活動の中であちこちに実例が生まれてきました。ある福祉施設は作家の作品をデザインの素材とした商品開発の際、企業とデザイナーと3者間で著作権使用の考え方を合意形成し、契約書の締結に至りました。また自宅で活動する障害のある作家が、講座を受講したことをきっかけに、かつて企業と契約した内容が、著作権そのものの譲渡を含んでいたということにはじめて気づき、今後は契約内容を理解し、納得のいく契約を行えるようになりたいとの相談の申し入れもありました。

著作権の概念を知り、障害のある作家の活躍の場を広げるには、研修と実践の両輪が必要です。作品の売買、作品の二次利用による商品化やライセンス事業などSOUPはさまざまな実践を行い、そのプロセスや成果を共有していきます。

※この講座の内容は、「障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城2015～2016」の46-57ページに掲載。webサイトでも公開しています。

ステップアップ研修

あしたの一步のために、ステップアップ研修

2017年3月23日(木)／みやぎNPOプラザ

対象者：自宅で活動している人、福祉施設で活動している人、支援者、家族、施設職員NPOの職員、教員 など

ファシリテーター：田口ひろみ(特定非営利活動法人ポラリス代表理事)、

アイハラケンジ(アートディレクター／東北芸術工科大学准教授／halken LLP共同主宰)

コーディネーター：柴崎由美子(NPO法人エイブル・アート・ジャパン代表理事)

取り組みのねらい

宮城県内で2014年度より研修を続ける中、障害のある人・家族、市民による小さなグループは、運営のマネジメントを学ぶ必要性があるのではないか、という問題意識が生まれました。そこで、「ステップアップ研修」と称し、2015年度は障害のある人たちの芸術活動に必要な支援として、1.材料・道具、発表の機会提供、2.場所・人的資源、情報の探し方、3.財源、組織運営、について学ぶ機会としました[※]。2016年度は、同じテーマに沿いながら、実際に宮城県内で障害のある人たちの芸術活動を実践するリーダーたちによるノウハウを公開する場としました。

実施内容

はじめに、宮城県山元町で活動を実践する田口ひろみさんが、特定非営利活動法人ポラリスの事例として、場も資金もないところから活動の理念をつくり、具体的な企画を掲げそれを実現するためにどのように資金を調達してきたかが紹介されました。例えば、現在の活動拠点は、地域の中でいいなと思っていた物件を大家さんに交渉し、机・いす・棚などの備品、筆・絵具などの材料・道具の整備は助成金を活用したことが示されました。また、ともに活動する仲間と目標を一つにする目的で国内の先進地の視察や勉強会、アートを介した仕事づくりとして商品開発、さらには法人設立後のスタッフ雇用のつなぎ資金にも、助成金を活用したことが具体的に示されました。

印象的だったのは、活動の理念が「障害者支援」から「地域コミュニティ創造」に変化したことに伴い、事業が発展拡大する中、助成金の規模も10万、50万、100万、300万と拡大し、それによってさまざまな仕事が生じたこと。そしてその期間がわずか1年半であったという事実でした。

次に、SOUPの活動に3年間伴走してきたデザイナーのアイハラケンジさんから、芸術活動をより生き生きと社会に発信するために、クリエイターという専門家と協働する意味や、クリエイターを地域で探すためのポイントをおしえていただきました。概要は次の通りです。

1.クリエイターの探し方：(i)さまざまな広報宣伝物に目を向ける。例えば、美術館・ギャラリー・カフェなどに置かれているチラシ／フライヤー、webサイトなどをみる。チェックポイントは、業種／業態が近いか、クリエイティブのトーンが意図しているものと近いかどうか。(ii)展覧会に顔をだしてみる。実際にそのクリエイターや関わった人たちと直接コンタクトを取ることができる。(iii)クリエイターの団体に相談する。例えば仙台でいえば「仙台クリエイティブ・クラスター・コンソーシアム」「とうほくあきんどでざいん塾」など。参加者は山形県や福島県からも来ていたため、産業振興課や地域の芸術大学の活用にも話が及びました。

2.クリエイティブの作業内容を知る：「デザイン」として一括りにしがちですが、実は沢山の人や作業を経て出来あがっているということを学びました。活動の内容や達成目標に応じて、外部の専門家を活用することが提案されました。加えて、プランニング、アートディレクション、デザイン、コピーライティング、編集、イラストレーション、写真、印刷／製本など、多彩な業種やその役割を学びました。

3.対価(費用)の考え方：目的、目標をしっかり立て、作業範囲を明確にし、目にみえない(形にならない)ところにも費用がかかっていることを理解して予算化することが説明されました。費用を抑えるポイントとして、「お願いする」のではなく「一緒にやる」こと、信頼関係を築くこと、長いお付き合いを前提にすることなどで、抑えられる費用もあることが紹介されました。

4.お互い気持ちよく仕事をするポイント：リスペクトの気持ちを大切に。簡単にできる作業と思わない。対価をしっかりと払う。丸投げしない(一緒にやる)。事業の志を明確にする。褒めてあげる。宣伝してあげる／紹介してあげる、など参加者もうなずくコツをきくことができました。

成果

二人の話に共通したのは、個人であれ、組織であれ、その活動の理念、目的、目標を整理すること、そして具体的な企画をつくることの大切さでした。それらをベースにしてはじめて、必要な人・モノ・資金が明確になり、おのずと社会からの支援(応援の声、寄付、助成金、売上など)が循環することが確認されました。また、展示会、商品、webサイトなど、人の目にふれる機会づくりの重要性も確認され、いい作品と活動にはおのずとファンやメディアがつくという話題に至りました。最後に、SOUPの事務局からは、こうしたクリエイター、アーティストなどの紹介にも相談で応じていること、2017年度はこうした人材を増やしていくための実践や場づくりも計画していること、助成金の情報はNPOの中間支援組織で常時、得られることなどを紹介し、どんな相談でも気軽にしてほしい旨をお伝えしました。

※2015年度の講座の内容は、「障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城2015-2016」の58-67ページに掲載しており、またwebサイトでも公開しています。